多和田葉子「シュタイネ」

大畑眞壽美

多和田葉子氏の「シュタイネ」(青土社 2017 年 10 月第 1 刷発行)を読んだ。(「ユリイカ」2016 年 11 月号～2017 年 8 月号初出)

以前読んで、不可解で驚いた「傘の死体とわたしの妻」以来約 10 年ぶりの日本国内での詩集発表。

最近「ユリイカ」の臨時増刊号(2004 年 12 月)で「総特集多和田葉子」を読んだ。
10 年、20 年経つと誰でも生活に変化は訪れる。
作品に影響はあるのだろうか？

多和田葉子氏は 1960 年生まれだから、ユリイカの臨時増刊号での写真は 40 代半ば。おかっぱの黒髪がまだ少女のようだ。

たまたま今日の朝刊に彼女の記事を見た。ドイツ在住。3 年ぶりの帰国中。
髪の毛は不思議な色。意志の強そうな目元が印象的だ。

「シュタイネ」とはドイツ語で石ころたちの意。

目次は 20 の詩篇を
1 パピア・コルプ(紙くず籠か)
2 シュティンク・ボーネン(納豆か)
3 チトローネ(檸檬か)
などとカタカナ表記のドイツ語を(日本語＋か)で補足？している。
本の表紙は小沢さかえ氏のパステルカラーの装画。よく見れば、はさみ、眼鏡、檸檬にも見えなくもない。

作品はどれもリズミカルでコトバ遊びのように調子がいい。わざと常用漢字ではなく、他の表記で読者を誘う。掛詞、連想ゲームかと。
落とし所は踏まえている。
それは経年変化かもしれない。

5 チガレッテ(煙草か)
このおっさんの隣にしばし留まっていたい/煙さが冷え切って/にがい/干からびた男たちの集まる焦げたにおい/(略)剥き出しの時間が/あふれ/ふれ/こぼれ/ぼれて/笑いかけてきても/見向きもせずに/煙草と睦まじく見つめ合っている/土色の顔をしたおっさん/の隣にわたしは/もう少しだけ/すわっていたい

(ちなみに/は改行と読んで下さい)

6 アウグスト(八月か)

夏はふいに終わって/外席のテーブルク/ロスが不吉にはたはためいて/(略)ランチはれんち社交的だった/ごわごわと白い布たちが/(略)ばたばたと無人の中で布だけが/ばたばたと/船帆/八月はもう秋

本当は様々な要素を含んでいるがそれを覆い隠して、その場に居る感覚をもたらす。

16 ウーバーン(地下鉄か)
乗ってください、美って/ドアです それは しまんまりましてから/ごっとん走り出しまする/車内に/片手が/落ちている/(略)濡れた靴底が/紺色の手を踏む ふむ ふむ /電車とホームの間に地獄があります/によって気をつけてください、ビッテ、 美って/(以下略)

書き写し間違いではない。
慣れてくると楽しくなってくる

19 ブリル(眼鏡か)
指紋が蜘蛛の巣になって/うつる、うつろうレンズは/(略)/まだ遠いはずの/月が見えるんだから/近眼とは言えないさ/半月の日は/左目が仕事を休んでいる

本の帯には「言葉のアニミズム、ここに極まれり！」なんてあるが、どうかなァ?

どの作品もシュール！
だけど、読めば読むほど身近に迫ってくる。
みんな読んで欲しい！